

「気付き」を問い、より深い「思考」を促す授業構成の工夫

～二段階の発問で討論を仕組む～

五泉市立五泉南小学校
教諭 阿 部 央 資

1 基本的な構え

二者択一型の討論（形式）を取り入れた授業にこだわるのには、理由がある。

- 1 答えるべき結論があるため、自分の立場を明確にすることができる。
- 2 論理的に理由を考え、発言できるようになる。

つまり、自分の立場を明確にさせることで全員の授業参加を保障し、理由を述べ合いながら考えを深める（思考力を高める）子どもの姿を期待しているのである。もちろん、やみくもに討論させればよいわけではない。特に、理由を述べるためには、子どもたち一人一人がある程度の情報を共有できていなければならない。そこで、次のように授業構成を工夫する。

「気付きを問う発問」の後に「思考を促す発問」を位置付ける。

「気付きを問う発問」とは、順序性を問わず、気付いたことをたくさん出させる放射状の発問のことである（例：似ているところはどこか、ちがうところはどこか、〇〇を読んでどんな言葉が思い浮かぶか、など）。一方、「思考を促す発問」とは、授業で考えさせたい中心発問であり、より論理的で順序性のある考えを引き出すための発問のことである（例：一番〇〇なのはどちらか、なぜ〇〇ではないのか、〇〇の原因は何か、など）。つまり、最終的に子どもに考えさせたいことの手掛かりとなる材料（根拠）を見付けさせる「気付きを問う発問」と、そこから絞り込んで考えさせる「思考を促す発問」を段階的に問うのである（二段階の発問）。

また、もう一つの手立てとして、次の点も重視する。

構造化した板書で「情報の見える化」をする。

機能を明確にした二段階の発問と、子どもたちの発言や思考が見える化する構造的な板書をもとに、期待する子どもの姿を目指した。

2 授業の実践（2年生 物語教材『わたしはおねえさん』より）

『わたしはおねえさん』は、主人公のすみれちゃんの行動や様々な出来事とおして、彼女の心の成長を感じることができる作品である。また、すみれちゃんが子どもたちと同じ2年生であることから、主人公に共感し、自分と重ね合わせながら読み進めること、もできる。そこで、すみれちゃんの

心情の変化やその原因を読み取ることを学習活動の中心とした。なお、本単元では、第6時で二段階の発問を取り入れることを想定し、学習を進めた（主な単元の流れは表のとおり）。

第6時。全文を、追い読み、リレー読み、一人読みで音読した後、第一段階として次のように問うた（「気付きを問う発問」）。

すみれちゃんが考える『おねえさん』のイメージは何でしょうか。

気付いたことを箇条書きで書かせ発言させると、ほとんどの子どもたちは、「やさしいおねえさん」「元気なおねえさん」「ちっちゃなかりん（妹）のおねえさん」「一年生のおねえさん」など、「歌を作るのが好き」なすみれちゃんが歌っている内容を発言した。また、「えらい」「やさしい」「がんばりもの」「りっぱ」「コスモスに水やりをする」など、すみれちゃんの台詞や内言、行動をもとに発言する子もいた。中には、「なきそうになってもなかない」「がまんする」「花の絵をけさなかった」「やさしい」「妹を大事にする」など、後半のすみれちゃんの変容した姿に目

時	主な学習活動
7 時間	①通読、音読、語句の確認、登場人物を問う。 ②通読、音読、時間と場所を問う。 ③二つの歌について問い、すみれちゃんの人物像を押さえる。 ④⑤すみれちゃんの心情の変化を押さえる（「心の温度計」）。 ⑥自分がイメージするおねえさんに近付けたかどうか考える。 ⑦物語のあらすじをまとめる。

を向ける子もいた。

そこで、「最初は、ただ「わたしはおねえさんだぞ。」と歌ったり話したりしていただだけのすみれちゃんでしたが、少しずつ気持ちや行動が変わってきたようですね。」と子どもたちの発言をまとめながら、第二段階として次のように切り出した（「思考を促す発問」）。

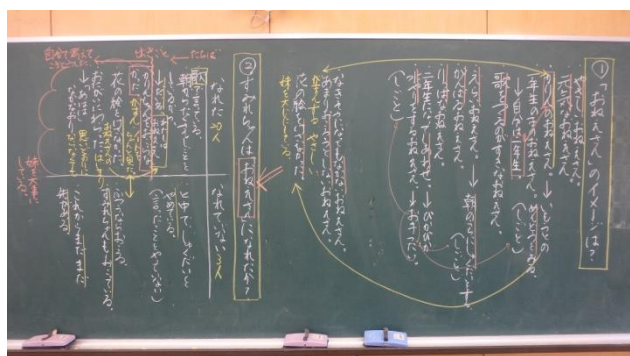
すみれちゃんは、「おねえさん」になれたでしょうか。

ここで言う「おねえさん」とは、年齢的な「おねえさん」ではない。妹のかりんちゃんとの関係で、自分の状況を捉えることができる「おねえさん」だと考える。したがって、すみれちゃんが「おねえさんに」なれたかどうか、第一発問を生かしながら、物語の展開やすみれちゃん的心情を推し量った理由付けを期待した。

「なれた」と考えた子どもたちは、「題名に書いてある。」「歌で何度も歌っている。」「朝からたくさん仕事をしている。」など、本文をもとに、自分たちの立場を説明した。すると、「なれていない」と考えた子どもたちから、「途中で宿題をやめている。」「言ったことをやっていない。」と反論。また、なれた派から「おこらずに我慢してノートを見ている。」「ノートの絵はすみれちゃんが世話をしたコスモスだ。」「だからおこらなかった。」という考えが出ると、「半分おこりそうだとあるからもうすでにおこっている。」という反論も出た。他には、なれた派から「花の絵を消さなかったのが「おねえさん」の始まりだ。」という考えが出ると、それに関連して、なれていない派から「これから成長していくからまだ十分ではない。」という考えが出された。

発言する立場は違うが、主人公のすみれちゃん的心情の変化に着目している点で、お互いの立場の共通点が明らかになってきた。そこで、「最初は、二年生で妹がいる「おねえさん」だった

けれど、最後に妹と「あはは。」と笑えたということは、相手の事を考えて大事にしようとする「おねえさん」になった証拠なんだね。もしかしたら、自分もかりんちゃんと同じだったなあという気持ちもあったのかもしれないね。」とまとめた。最後に、「そんなすみれちゃんの成長の物語があるんだよ。」と言って、『すみれちゃんシリーズ』を提示。「読んでみたい人？」と聞くと、思いのほか反響があった。



3 今後に向けて

単元のまとめとして、すみれちゃんの心の成長（変化）をどのように捉えることができたか、「本とうのおねえさんとは…」という書き出しで子どもたちに書かせた。「おねえさん」になれた派だったある児童は、成長途中であるという相手の意見に納得し、次のようにまとめた。

本とうの「おねえさん」とは、ただたんに生きることではなく、せいちょうしつづけることだ。でも、いもうとをせいちょうさせることも大せつだ。

このように、年間をとおして二段階の発問で討論を仕組んできた結果、どちらの発問においても、全員が考え、発言することは十分に達成することができた。一方、「思考を促す発問」において、自分の考えをきちんと文章化したり、根拠の意味付け（解釈）を明らかにしたりする点で、個人差が顕著であることは否めない。この力を伸ばすことが、考えを深める（思考力を高める）ことにつながると考える。表面的な発言のやり取りに終始しないよう、今後も討論（形式）の授業の在り方を追究していきたい。